

洋子は、恐る恐る俺に聞いた。腫れ物にでもさわるような調子だった。

「並木は死んだよ。」

俺がボンッと答えた。

洋子は、エッと聞き返すような顔で俺を見た。聞き違えてでもしたと思っただろう。

「並木は死んだ。俺が殺したんだ。」

洋子は、一瞬、棒でも飲んだようにキッと硬くなった。それから、まじまじと俺の顔を見つめた。そして、小刻みに震えだした。

俺の淡とした調子が、かえって洋子に真実を悟らせたらしい。

俺は一、二歩、部屋の中へと足を踏み入れた。洋子はそれに従って、震えながら後退っていった。

「並木君を、並木君を殺したの……。」

やっこのことで、洋子はそれだけを言った。さほど広くもない洋子の部屋で、俺達二人は不自然に立ちつくしていた。

「そうだ、殺した。奴が俺を殺そうとしてたから、先に殺そうと思って。でも、俺を殺すのは奴じゃなかった。だから、俺は……。」

頭の中が混乱していた。話筋道がつかなかった。洋子に説明しようとしていながら、もどかしさが先に立って、何から話していいか判らなかった。

そんな俺を、洋子は恐怖のままざざで見つめていた。顔から血の気が引き、唇をぎゅつとかみしめていた。

「洋子！」

何も言う言葉が見つからなくて、それだけを叫んだ。とにかく、今の俺には洋子に助けてもらうしかない。洋子に説明してもらって、全てをはっきりさせて。

だが、洋子の反応は俺の期待していたものではなかった。彼女は、今の言葉でますますおびえたように壁際へ寄っていった。

「洋子……。」

俺は彼女の方へ近寄ろうとした。

「寄らないで！」

洋子が激しく叫んだ。

「こっちへ来ないで、あなたは人殺しよ！並木君を殺したんだわ！」

その言葉が、俺の頭にカッと熱い血をたぎらせた。「洋子、まさかお前。」

そうだ、そうなのだ。俺を殺すのは洋子だったのだ。並木を殺した俺を憎んで洋子が。俺は洋子に殺されるために並木を殺したことになる。そんな莫迦な。それではあまりにひどすぎる。

だが、それで全て辻褃が合うのだ。皮肉な運命の

めぐり合わせは、そんな悲劇を俺に押しつけたのだ。

「洋子……。」

俺はフラフラと彼女の方へ歩み寄って行った。洋子は壁ぞいに、俺から逃げようとしている。

「やめて、来ないで！」

彼女が叫んで俺が手をのばそうとした瞬間、何かに蹴つまづいて、俺は思わずヨロめいた。

壁際の彼女に夢中になっていて、部屋の中央にあったテーブルに気がつかなかったのだ。

テーブルを蹴とばして、俺自身も床へ倒れ込む格好になった。

だが、部屋の隅にいた彼女には、それも逃げ出す機会にはならなかった。むしろ、俺が立ち上った時には、間にあつたテーブルが無くなってしまつて、直接俺と対する形になってしまった。

「お前、俺を殺すのか……。」

洋子はイヤイヤをするように首を横に振った。そして、壁にもぐり込みでもするように、ますます隅に身を寄せたが、ふと俺の右手を見て、はっと息を呑んだ。

自分でも気付かぬうちに、俺の右手には鋭い果物ナイフが握られていた。さっきテーブルを蹴とぼした時に、上にあつたナイフが床に落ちたのだ。それを倒れ伏した俺が、起き上がる時に、手に持っ

まったらしい。

自分で意識しなかったにしろ、そのナイフの冷たい光は俺を凶暴にした。

俺は右手にナイフを構えながら洋子に近づいて行った。

洋子は恐怖に目を見はらせ、壁際に身を硬くしていたが、突然、生存への本能が彼女に行動を起こさせた。

それは、なにげなく俺がナイフをさし出したのと同時だった。

壁際から、俺の横をすりぬけようとして立ち上つた彼女の体へ、俺のナイフが事も無げに吸い込まれていった。

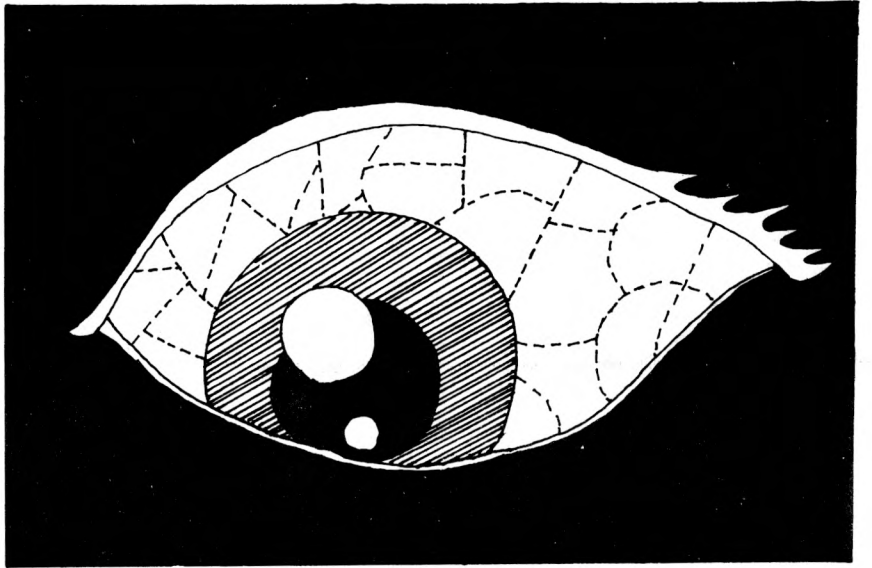
俺が意識していなかったにもかかわらず、その鋭利な刃物は、彼女の心臓を、ものの見事に貫いていた。

「ひいっ。」

小さな悲鳴が上って、洋子はその場にくずれた。ショック症状が始まって、彼女の体が硬直し始めていた。

「なぜ、なぜ……。」

小さく震える唇から、聞き取りにくい声もれた。何故殺したのか、と言おうとしているのかと思つたが、彼女の唇をついて出た言葉は違つていた。



「なぜここを、なぜここを刺したの？」
「どういう意味だ。」

俺も気が動転していた。殺す気でいたくせに、本当に洋子が死ぬとなると、とてつもなく悲しかった。「し、しばらく前から、この所、心臓の真上に小さな赤い筋があったの。何だろうと思ってたら、あなたが…、あなたが、その通りの所を刺したわ。」息が乱れていた。ぜいぜいいう声で、ひどく聞き取りにくい。

「なぜ、なぜ……。」

そのまま、事切れた。洋子は、不審な表情を顔に張りつけたまま、息絶えてしまった。

俺は茫然と、洋子の死体を見つめているだけだった。

洋子が死んだ。

だが、今の俺はそれだけに心を奪われているのではなかった。洋子も自分の切り取り線を持っていたのだ。しかも、それは俺によって記された切り取り線だった。

俺を殺すのは洋子でもなかった。

では、いったい、俺を殺すのは誰なんだ。俺の体に切り取り線を刻み込んだのは誰なんだ。

俺は死なねばならん。この切り取り線の通りに死なねばならん。

洋子は切り取り線の通りに死んだ。並木も、そう
だ並木にも、俺と同じような切り取り線があったに
違いない。

しかし、俺には見えなかった。いや、誰にも見え
ないのだ。本人以外には。

誰にでも皆、切り取り線があったのだ。各々が各
々の切り取り線を持っていたのだ。俺がそれを知ら
なかっただけなのだ。

俺は自らの切り取り線に挑戦しようとして、結局、
関係のない二人の人間に切り取り線を刻んでしまっ
た。

いや、切り取り線を刻んだのは運命だ。運命のい
たずらだ。しかし、手を下したのは俺だ。

あの二人は運命通りに死んだ。俺も死ななければ、
誰か俺を殺してくれ。俺を殺すのは誰なんだ。

ふと手を見た。手の甲に刻まれた切り取り線は、
ますますはつきりと、今にも熟れてはじけそうに、
赤く盛りあがっていた。

誰か殺してくれ、誰か。

俺はフラフラと部屋の中をうろつき回った。今は
もう、自らを葬り去ってくれる人間の出現を待つて
いるだけだった。

このまま訳も判らずに、運命に、切り取り線にも
て遊ばれるのは、もうたくさんだった。

突然、背中に鋭い痛みが

シャツが生暖い液体で濡れ、体に張りつくのが判
った。

右腕に同じような衝撃がおこり、左の手の甲が、
突如、血を噴き出した。

切り取り線が、切り取られ始めているのだ。

誰だ、誰がやっているのだ。

左足に痛みが走った。右肩が血を噴き出した。

俺は血みどろになりながら、部屋の中を見回した。
誰もいない。

右足からガグンとのめり込み、床に倒れ伏した。

絨毯の上をころがって、さっきまで立っていた所を
見返すと、右足が大腿部から切り取られ、床の上に
ゴロリところがっていた。

その足が、何者かの見えない力によって、ますま
す小さく切り刻まれていった。

嫌だ、こんな訳も判らないことで死にたくない。

腹部に痛みが走って、内臓がべロリと絨毯にこぼ
れ落ちた。

全身は、痛みを通り越して、痺れたような感覚に
支配されていた。

ふと、その鈍くなった頭に、電車の音が響いた。
そうだ。電車だ。

洋子のアバウトは線路沿いにあった。窓のすぐ下

を、電車が走っていた。

電車だ。

俺は、額から流れ落ちる血で半分見えなくなった目を必死に見開き、その窓を捜した。誰も殺してくれないのなら自分で死のう。

訳もなく死ぬのだけはごめん。

こうなったら、運命の奴に、自分の手で決着をつけてやるのだ。感覚の無くなった両腕で、必死に窓際へにじり寄った。

イモ虫のような不格好な姿で、それでもじりじりと這い進んでいた。

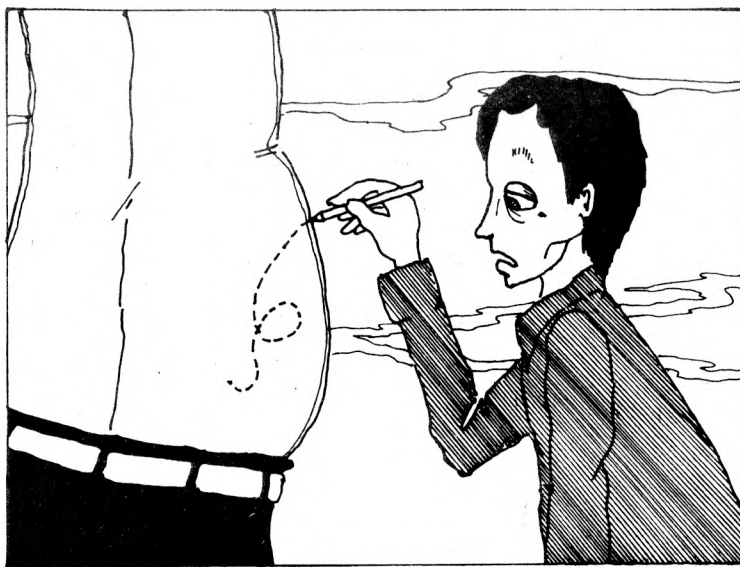
おぼつかなく動く両腕は、左腕が、手首から先が無くなっていった。

ふと、体が軽くなった。進み易くなったが、何かをひきずっているような感じが残った。ふり返って見ると、腰から下が、さっきの所にまだ残っていた。それでも俺は、上半身だけで、内臓をひきずりながら、這い進むことをやめなかった。

いったい何の力で生きているのか、何のために進んでいるのか、自分でも全く判らなくなった時に、遂に俺の体は、窓際へたどり着いた。

わずかに数本の指の残った右腕を持ち上げ、窓枠にふれた。

やった、遂にやった。これで俺は、やっと自分の運命に決着が着けられるのだ。その途端、頭蓋が砕け、脳髓が飛び散った。



編集後記

ここ数年、SFという言葉が一般的になってきた。小説だけでなく、TVや映画等様々な分野から、SFに興味を持つようになったり、SFの新たな可能性を感じた人達も少なくないだろう。我がMSFCもその例にもれず、すでにほぼ4年の間、メディアの拡大（の下でのSF）をテーマとして、舞台劇、録音劇、8%映画の上映等々、活字からちょっと離れた所で活動してきた。これらは疑問符付きながらも、一応手ごたえあるものとして残り、定着化しつつあると言えよう。

こういう状況下でのTERRAの復刊は、非常に大きな意味を持っている。第一に、再び活字の世界に戻り、多様化しつつあってその核がよく見えなくなってきたSF小説を、じっくり見据えてとらえる事が出来ること。第二に（これは、傑作選にしようという、TERRAの編集方針から来るもののだが）現在、MSFC内でさえ10余りの雑誌が発行されているように、個別化しがちなサークル

活動、三支部の独自の活動を、総合的にとらえ集大成する事が可能な、唯一の統一誌だということ。この二点をあげるだけで十分判ってもらえるだろう。

さて、編集を終え、いざ一冊の本という完成した形になってみると、これには不満が多い。新たな不満足感にとらわれたと言うべきか。準備段階での大変な不手際に始まって、本当に出来あがるまでに、サークルのみんなに何度も迷惑をかけておきながら、私の口から言えたセリフではないが、最初の意図が活かされず、はなはだ不明瞭な代物となってしまった。ここに、協力してくださった人達みんなに、ありがとうと言わせてもらおう（ついでに謝まっちゃう。ごめんね）。

最後に、学生サークルの限界というものもあるだろうが、ぜひそれを越えるような活動を展開してもらいたい。がんばってな。（A）

「無能!! 役立たず!!」（加藤淳）

えっ?! わしゃ何も言えんよ。（㊦）

TERRA Vol. 1

発行 昭和55年12月14日

発行人 萩尾洋美

編集人 渡辺正行

発行所 千代田区神田駿河台1ノ1

明治大学SF研究会 (MSFC)

印刷所 共信印刷

連絡先 〒272 市川市市川南3ノ2ノ31 第2成美荘7号

渡辺正行 TEL0473(21)1189

MSFC